

巻頭言

「メンテナンス元年」といわれて

辻 靖 三



新年明けましておめでとうございます。謹んで新年のお祝いを申し上げます。

2014年が始まりました。一昨年来、公共施設等での供用中の事故をきっかけにして、既存施設の維持管理の問題が建設界の大課題となり、メンテナンスという大きな仕事の領域に注目していく意味で、「メンテナンス元年」となった。公共施設も民間施設も建設するのが目的でなく、言うまでもなく、目的とした機能を継続的に発現されることが本来の目的である。国土上にはこれまでの先人たちの努力の成果が、膨大な資産を形成し国力となっているし、更に資産の追加がされている。新規の建設も当然必要であるが、既存資産のメンテナンスの仕事は増加の一途となる。

メンテナンス部門は、新規の建設部門より一段と課題が多い。一つ目は、完成した建造物自身は個々に設計状況、施工状況により「生まれ方」に差がある上に、経年利用の過程で場の環境、使われ方により「育ち方」が異なってきている。その現状の「健康調査・診断」をし、先々の役割という「身の処し方」に対し最適な「処方箋」を見出し、その「処置」の実施に際しては、概ね「入院」しないで「生活」を継続しながらの制約条件下で不具合箇所毎の程度に応じた、多様な材料、機材、施工法で「健康回復」する必要がある。すこぶる多様で現実的かつ技術的な課題があり、理論的に定まり易い新設と比べて解の選択肢が多く、技術的な難易度が高い一面、技術的にチャレンジャブルな仕事とも言える。

二つ目は、維持管理部門のこれまでの仕事の組立は、現場条件から多様で小単位の作業が多く、工事期間が長くなる、過程で変更が生じ易いなどの技術的な特質の他、工事規模は大きくはならない。それに契約から工事管理、検査までの建設生産システムの中で、大きな工事と手続き面等の負担感が相対的に大きくなるという課題も大きく、結果として、企業の収益性が薄く

なりがちであるので、担い手にとってメンテナンスビジネスに対し消極的になってしまう傾向になるという課題がある。

三つ目の維持管理は、施設が本来有する便益を失いそうになるのを、更に先々まで便益を継続的に得るための仕事で、ライフサイクルコスト論の通り、適時に実施することにより、小さいコストで効果を出せる仕事である。ただ、施設管理者側が適時に必要な維持管理の資金を投入できるか、これが大きな課題である。

筆者の考えとしては、前述の状況を改善していくには、二つ目の課題に対しては、数十年余続けてきた維持管理部門の建設生産システムを、現在の受発注者の体制、陣容でも持続的発展可能なシステムに再構築することがまず不可欠と考える。三つ目の課題に対しては、管理者が保有している施設の量に応じて一定の維持管理資金を積み立てていければ適時にできるが、現実的には困難な場合が多い。一つ目の課題に対しては、維持管理工事の実施段階で受発注者双方で、その現場で効果的な技術面での建設生産性を上げるための努力をすることが必要である。調査・測定・診断部分から、新材料・新機械器具・新施工法・現場管理方法・検査法・データ管理法等の技術関係で、従来の建設部門と異なる異種の技術も組み込んだ技術の開発をし、受発注者双方で実用化し、生産性の向上を実現することである。建設機械についても、これまでの概念を拡大し、建設の様々な局面で効果的に生産性を向上できる機械・装置・器具の開発、実用化を新分野として、大きな意味での建設機械の視野に加えて取り組むべきであると考ええる。

魅力ある分野として、人材が生き生きと活躍できる姿を、今年の夢としたい。